

創作・鑑賞をふまえた俳句の授業

——扉としての俳句——

学校教科書における俳句

現在施行されている『学習指導要領 生きる力』（平成二十年三月告示^①）では、小学校第3学年及び第4学年に対する「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に、短歌、俳句の学習について次のように記載される。

1 「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

（ア） 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

短歌、俳句については「文語調」の「伝統的な言語文化」が重視されている。また『新学習指導要領』（平成二十九年三月告示^②）で

は、「易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。」に改訂されており、同じく「文語調」に限定するほか、現行指導要領に比べ音読、暗唱を重視して鑑賞に踏みこまない姿勢に転じているともとれよう。

しかし第五学年及び第六学年に対しては、「書くこと」の能力を育成する「指導のひとつに「経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること」（現行版）とあり、物語や詩歌を創作することが求められている。これは『新学習指導要領』では「短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動」と改訂されている。物語、随筆を省き短歌、俳句が残されるなど創作面にも期待があることがわかる。

小学校教科書における「俳句」の位置づけは、「伝統的な言語文

化」に親しむ「音読」と、自己の経験を表現する「創作」のふたつの点が期待されている。ここでいう「伝統」の内容としては「文語調」であることが第一であり、また明記されていないが「有季定型」（五七五の定型に季語がふくまれた俳句）であることも期待されているだろう。^③

小学校低学年ではまだ古典文法も指導されていないため、「伝統的」な「文語調俳句」を対象とすれば、「鑑賞」より「音読」が重視されることはやむをえない。しかし「創作」へつなげるためにはより児童に親しみやすい、口語調の俳句をふくめて例示するほうが理解しやすいだろう。また、親しみやすい俳句を導入として「言葉の響きやリズムに親しむ」、そのうえで文語調の俳句への踏みこんだ「鑑賞」にも広げることも可能と考えられる。

一方ではほぼ全ての中学校・高等学校教科書においても俳句を紹介する単元が用意されているが、その位置づけ、目標は小学校のそれより曖昧である。表1は、現行の教科書に掲載されている俳句の一覧である（後掲）。種田山頭火の「分け入つても分け入つても青い山」は八社、「うしろすがたのしぐれてゆくか」は五社に採用され、坪内稔典、夏石番矢といった口語調の現代俳句作家をふくめ、多様な俳句が示されている。

このうち東京書籍『新しい国語3』、光村図書『国語3』では俳

句作品だけでなく、それぞれ片山由美子氏、宇多喜代子氏という代表的な俳句作家の書き下ろし文が掲載されている。ここでは季語、定型、切れ字などの俳句の基礎的知識が紹介されており、鑑賞の手引きとしての役割が期待されている。すなわち、中学校・高等学校教科書における「俳句」単元の学習は、小学校における学びをふまえ、より踏みこんだ理解へとつなげることが求められているといえよう。

近年、俳句をユネスコ世界文化遺産に登録しようと求める運動が、ニュースとして大きく報じられた。^④この運動には俳人協会、現代俳句協会、国際俳句協会、日本伝統俳句協会の四団体のほか、三重県伊賀市、愛媛県松山市などの市町村も加わっている。運動の中心となった国際俳句協会の有馬朗人氏は、俳句の特色として大人も子どもも楽しめる短詩であり世界に広がること、自然と共生する姿勢をもつことをあげている。^⑦有馬氏はさらに、日本文化の宝として俳句が再評価されることで、俳句が世界平和に貢献できると考えていると主張している。

改めて俳句へ注目が集まっているといえるが、一方で、「日本文化」や「伝統」、「世界遺産」といった枠組みにとらわれることで、俳句の定義が教則的になるのではないかとの懸念も表明されている。^⑧ここでその是非を問うつもりはないが、学校教育の現場ではよくか

ら多様な俳句文化にふれることは、一面的ではない詩歌の「伝統」を知ることになり、より豊かな学びにつながるのではないだろうか^⑨。

先行研究と本稿の位置づけ

俳句を活用した授業実践についてはすでに多くの蓄積があり、特に創作面を重視したものとして坪内稔典『坪内稔典の俳句の授業』（黎明書房、一九九九。増補版、二〇一〇）、三浦和尙、夏井いつき編著『俳句の授業ができる本 創作指導ハンドブック』（三省堂、二〇一一）がある。坪内氏は京都教育大学在任中に多くの俳句教育に関する論考を発表しており、ほかの多くの論著と並んで参考になる。また夏井氏は近年テレビのバラエティ番組でも活躍しているが、もともと全国で「句会ライブ」を展開し、高校生を対象とする俳句とデイベートの全国大会、松山俳句甲子園^⑩の仕掛け人としても知られている。

創作講義の実践報告例としても多くの報告があり、特に中学校・高等学校を対象としたものに風間重利「俳句創作を通じた自己表現と相互交流の可能性」^⑪、頼岡由美「短歌・俳句に学ぶことばの力…主体的に活動する場をどう作るか」、大学における外国人留学生対象の日本語教育の実践として小林可奈子「俳句学習の可能性」^⑫などがある。

鑑賞・解釈を重視した学習については、西尾勝彦「俳句授業の試み—ショートストーリーの作成を中心に—」^⑬、廣瀬充「中学校第3学年国語科学習指導案 俳句調べ」^⑭、岡崎忍「生徒が主体的・協働的な学習を実現するための授業に関する一考察…中学校3年生の俳句の授業実践報告」^⑮などがある。

また石塚修「多様な「解釈」を楽しむ俳句の授業—俳句指導の類型化の問題点を考える—」^⑯では、国語教育における「俳句」の授業実践についての蓄積を認めながら、「類型化した」授業が行われていることを指摘し、当時の中学校国語教科書に掲載されていた六十七句を対象に、中学生がどのような俳句に関心をもつかを報告している。そのうえで生徒が自由に記述した物語的な俳句の鑑賞を相互に批評しあうことで、読みの多様性を学ばせるという授業実践が述べられている。非常に興味深い試みであるが、俳句の基礎的知識を学ぶところから十時間を費やしており、実際に行うには難しいだろう。

俳句鑑賞をストーリー化する試みは西尾報告でも行われている。ここでは教科書に掲載された十五句の俳句全てについて「二〇〇字前後のショートストーリー」を「制限時間七、八分」で鑑賞、記述させている。生徒は、個々の俳句についての難解な語句、季語、切れ字などの解説をふまえたうえで鑑賞しており、「多くの生徒は、

回を追うごとに俳句世界を正確かつ想像性豊かに受け取り、表現していた」一方で「十五回すべてにわたって直訳調から脱することができない生徒が数名いた」という。鑑賞を対象とする講義ではある程度やむをえないともいえるが、かなりの授業時間がとられることは課題であろう。

筆者はこれまで複数の大学において、俳句を取り入れた創作講義を実践してきた¹⁸⁾。このうち京都造形芸術大学では、一年次生を対象とする基礎的な日本語学習の講座のなかで二時限を俳句の創作・鑑賞に宛てていた。その際気づいたことは、俳句の創作を体験することに俳句鑑賞文の指導がその後の文章指導にも直結することである。

学生の実作は、実際にはつたなく、類型的なものが多いが、実作を体験することで定型や季語の理解が深まり、また創作の体験をふまえることで自分にはない表現の豊かさにも気づくことができる。創作の完成度を目指すのではなく、文学鑑賞の導入として俳句を位置づけていくことが可能ではないか。

本稿は右の経験をふまえたうえで、俳句の創作・鑑賞を中学・高等学校の生徒を対象とする授業案として提案する。

大学における授業実践(1) 創作

第一時…俳句の創作

目的…俳句の基礎的な知識を学び、実作をおこなう。

対象…四年制大学一年次生。(中学三年〜高校生に対応可)

俳句の基礎的な知識として、季語・定型について解説する。とても基本的には

季語…季節をあらわす言葉。時代によって変化する。一句にひとつが原則。

定型…五・七・五の形。和歌「五七五七七」の上句から派生した。

といった、ざっくりとした説明でよい。場合によっては連歌から俳諧連歌の発句が独立した、という文学史的説明を加えてもよいだろう。五七五の音数の数え方は「チュ・ー・リ・ツ・ブ」が五音であると例示するのがわかりやすい。

むしろ重要になるのは、季語がなぜ必要か、という意義づけである。筆者は講義において次のように解説している。

季語は一語に含まれる情報量が豊かであり、短い俳句のなかで場面設定に便利。

たとえば「雲の峰」という季語は入道雲のことであるが、季語を

置くだけで夏の暑い盛り、雲がそびえる光景を思い浮かべることができる。つまり「雲」の見えるよく晴れた青空が想像され、時期、気温、天候、屋外か屋内か、さらに季節にともなう心情として晴れやかさや、夏休みを想像させるノスタルジックな気持ちなども想起させる。

季語の働きを実感させる仕掛けとしてよく行っているのが、俳句の季語を入れ替えるという実験である。「雲の峰」で歳時記などをめくると出てくる有名人に

厚飴割ればシクと音して雲の峰 中村草田男 『銀河依然』

がある。これを他の季語に入れ替えて鑑賞してみるのである。たとえば、

海に出て木枯帰るところなし 山口誓子

表1のうち五社以上に掲載されている著名な句である。この「木枯」（冬の季語）を当てはめてみると、次のようになる。

厚飴割ればシクと音して木枯

原句が、晴天のもと大きな饅頭（厚飴）を割って食べるという健康的な情景だったのに対して、寒い木枯らしのなか饅頭を割る句になった。「木枯」は四音であるため、音を整え「冬の風」と置き直してもよい。冬のほうが暖かい饅頭にふさわしいと感じる人もいるかもしれないし、「シク」という独特の擬音が寂しげに響くという

感じ方もあるだろう。少なくとも原句はむくむくと雄大な「雲の峰」と、手で飴を割るひそやかな音との対比があるが、「木枯」には内面に迫った寂寥感がある。あるいは

鯛雲人に告ぐべきことならず 加藤楸邨

これも高校三社に掲載される句であるが、同じ雲を示す「鯛雲」（秋の季語）を入れ替えると

厚飴割ればシクと音して鯛雲

雲の峰人に告ぐべきことならず

となる。前者は「厚飴」と「鯛雲」が食べ物つながりでおいしそうだと感じる人もいるだろうし、うるさいと思う人もいるだろう。秋口の涼しい季節、鯛雲の見える夕方のほうが美味そうだ、という感想もあってよい。後者は、秋の憂いを帯びた季節から健康的な雲の峰に変化したことで、「告ぐべき」内容も大きく変化するだろう。こうした例句を鑑賞を通じて、特別な感情語²⁰（うれしい、さみしい、たのしい）などを用いることなく季語によって様々な情報を手に入れることを実感する。また「雲の峰」を選択した原句の意図²¹について考えることにもつながる。

草田男句の「厚飴（を割る音）」と「雲の峰」、楸邨句の「鯛雲」と「人に告ぐべきこと」のように、二物の対比で詩を生む技法を「取り合わせ」と呼ぶ。俳句の実作においては「季語以外」を考え

たうえて「季語」を「取り合わせる」という過程が、導入としてよく利用される。「雲の峰」など五音の季語であれば、残り十二音の内容を考えればよい。²²⁾ そのように説明すると学生にも負担が少なく、たとえば十分程度の考える時間を与えることで次のような俳句が生まれる。

雲の峰聞いて欲しいなこのはなし

唐揚げを食べて見上げる雲の峰

サバンナははるかかなたに雲の峰

雲の峰私もなかに入りたい

いずれも大学生の作品だが、一部季語を「雲の峰」に変更した。²³⁾

授業ではこれらの句を無記名で提出させたくて黒板に筆写し、

作者名を伏せたままで人気投票を行う、略式の「句会」を行った。

むしろ教員が期待する俳句とは違う、学校生活の不満をあらわしたサラリーマン川柳的な句や、笑いをとりにいった句が一位になることもあるが、あえて自由を選ばせる（自分の句は選ばない）。そのうえで、なぜその句を選んだか、選ばなかったか、といった質問を学生に行い、肯定的な意見と否定的な意見をぶつけあわせる。どのような意見でも構わないので言うように、とうながし、自分とは異なる意見、見方があったことを意識させることが重要である。

教員側に俳句の知識がある場合は、生徒の人気投票に対して俳句

としての評価基準を示し、指導することもありうるが、現場の教員に知識がなければ、あえて教員もいち読者として投票に加わってよい。教員にも「絶対の知識、自信はない」ことを、場合によっては明らかにしたうえで、教員がどの句をいいと思ったかを学生と話し合う場にした。²⁴⁾

なお、自由に俳句を作らせると、必ず生まれるのが「季重ね」である。「夏休み」「プール」「アイスクリーム」など代表的な夏の季語は事前に示し、「雲の峰」によって夏であることは示されるので一句にひとつが原則、と指示しておくのがよい。

大学における授業実践(2) 鑑賞

第二時…俳句の鑑賞

目的…俳句の基礎的な知識を学び、鑑賞をおこなう。

対象…四年制大学一年次生。(中学三年〜高校生に対応可)

第二時は俳句の鑑賞を行う。鑑賞にあたって教員が選んだ、正岡子規以降の代表的俳句五十句を提示し、そのなかから好きな句二句を選んで、二種類の鑑賞文を書くことを指示した。字数はそれぞれ四〇〇字程度として原稿用紙を配布したが、実際にはタイトル、氏名のほかに句の引用があり、三〇〇字弱となる。

対象となる俳句は、学校現場であれば教科書掲載の句から選んで

もよいが、できれば教員自身ができるだけ多様な俳句を示すことで、画一化された俳句ではなく、俳句表現のもつ豊かさに気づいてほしい狙いがある。^⑤

A. 形式的鑑賞文

まず季語と季節を指摘し、句の内容を具体的に解説する。そのうえで、自分がどの部分を、なぜよいと思ったか、どう考えたかを、具体的に句の表現をふまえて書く。

B. 創作的鑑賞文

句の表現をもとに、自由に句の内容、場面を想像し、自分が好きなように書く。

Aに関しては作文指導を兼ねる。季語の指摘や、鑑賞文に適した文体、語尾などを指定し、ワークショップ形式であてはめていく。具体的には

作者は▲▲。この句の季語は「○○」、季節は□である。一句を読んでイメージするのは、○○○といった情景である。／○○○という姿である。

私がこの句を選んだのは○○○だからである。「＝＝＝」という表現から、○○○だとわかる。「○○○」という表現が意外で、面白かった。

……というところが、この句の魅力である。

といった利用しやすい文体、語彙を例示したうえで、これらを使って具体的な表現にもとづいて鑑賞するように、と指導を行った。これらは一見、学生の自由な表現を制限しているように見えるが、実際にはどの句に注目し、どういった面白さを引き出すか、といった根本的な選択が委ねられており、かえって個性を出しやすい。学生は多くの場合、直感的に「この句がいい」と選ぶが、その「よさ」を具体的に記述する場合、文体を整えることで端的に自分が「よい」と思った表現を指摘し、記述できる。これは季語、定型といった制限を課したうえで個性を出す俳句的発想に近い。

Bの創作的鑑賞文は、前掲の西尾氏、石塚氏が実践する授業形式に近いものである。芸術系大学の学生対象だったこともあるが、事前に創作を体験し、季語の働きなどを学んだことで鑑賞にも入りやすく、句の内容に入り込んだ物語風のもの、アニメーションを見るように情景を説明するもの、など自由な鑑賞がおこなわれた。A、B両方を行うことで、場面によって異なる文体を使い分ける意識なども喚起できたかと思う。

以下、学生による鑑賞文の一部を公開する。^⑥

A 「センチメントな」

秋深し手品了りて紐は紐

高柳克弘作。上五の〈秋深し〉から季節は秋だとわかる。

わたしがこの句を選んだ理由は、中七下五にある。〈手品了りて紐は紐〉。手品が終了してしまえば、小道具として使われた紐は無意味な紐である。その当然の情景に、季語である上五の〈秋深し〉が重なることで言い表しようのない寂しさがこみ上げてくる。華やかで人目を引く〈手品〉をあえて終わらせた、という部分にも、作者の意識が感じられる。

秋が深まり肌寒くなったこの時季こそ味わうことのできるセンチメントな一句であろう。

A 「夏の子どもたち」

分け入っても分け入っても青い山

作者は種田山頭火。

この句の季節は夏。この句を読んで私が想像したのは、真夏の日中に元気な男の子の兄弟が元氣いっぱい森の中をかけ巡っている姿である。そこからは、せみの声や子どもの足音、笑い声までもが聞こえてくるようだ。

私がこの句を選んだ理由は、「分け入っても」を2回繰り返すことで青々とした森の中をどんどん進んでいく動きを感じられたからだ。そこから好奇心や冒険心をただよわせる一方、言葉を繰り返す

ことで出口のない迷宮に入ったかのような不安や恐れまでもが感じられる。

この句から、最初は期待や好奇心があつたが後にだんだん不安な空気を漂わせてくる。このような時の流れも感じられる作品だと私は思った。

B 「高いところから勢いよく落ちる水」

滝落ちて群青世界とどろけり

作者は水原秋桜子。

この句を一度読んだとき、私は大きな樹々と生い茂る草花に四方八方を塞がれたのだ。威圧的ではなく、怪しい気配も感じない。この景色に相応しい言葉、「格が違う」。

二度目にこの句を読んだとき、豪快に揺れ動く樹木の間を無理やりに押し通るかのような轟音が聞こえた。何かと思つた私は、立派に成長した草木を掻き分け、この森全土に響き渡る音の源を指した。段々と進むにつれて樹はどんどんと高く、太くなり、雑草たちは草藪と化していった。

三度目にこの句を読んだときだった。突然視界が広がつたのだ。私はその水の流れ落ちる様に釘付けとなり、ずっと音を聞いていた。

B 「輪挿し」

ぼんぼんだりあ

ばんばんがある

るんば・たんば

作者は高柳重信。

女が欲しい。そう思った。上野のプラットホームのベンチでなにをするわけでもなく、ぼんやりと、そう思った。

ばかになりたいと思うときがある。おればばかではないからだ。

ばかが良い。考えなしに脳なしに、てれんこてれんこ、それで良い。

なあそこのお嬢ちゃん！ えらいべつびんやなあ…お花みたいに

真っ赤でヒラヒラのスカートよう似おとるわあ。な、な、ええこと

しよや！ お手々繋いでくるくる、くるくる。ダンスダンス、ルン

バルンバ、俺のお郷は丹波、丹波、なあんで……

列車に乗って宿に帰った。

扉としての俳句

前掲の風間氏は、「国語科教師にとって短歌・俳句・現代詩は鬼門」であると述べ、実作者ではない教員にとって「結局は俳人や歌人、詩人の伝記と絡めて授業らしくさせるのが関の山」だと嘆いている^④。そのうえで句会の授業を実践し、「生徒が自己表現の欲求を

非常に強く持っていること」が実感され、「普段表には見えにくい生徒の表現意欲や能力も、条件さえ整えていけば画期的に引き出すことが出来ることを痛感」した、と述べている。こうしたコミュニケーションを重視した授業展開は、これからも国語科教育のなかで重要性を増していくと考えられるが、そのための時間が大幅に割かれ、教科教育を侵食するといったことでは、なかなか導入が難しいであろう。

また坪内稔典氏の句会実践をもとに、詩の創作授業に応用を試みた山本純子氏は、飛躍をはらんだ詩の創作を指導したことの意味を、次のように述べている^⑤。

論理的に最後まで続けない、最後の部分で強引に飛躍すること
を求めた。……強引さを求めたのは、次の理由にもよる。国語
の授業の多くの分野では、論理性が求められ、強引さは嫌われ
るが、文学では、「人を愉快にする強引」が作品の質を決定す
る大きな要素となっている。そのことを、意識的に自らの創作
に活かしてほしい、という勧めである。

山本氏は明言していないが、創作講義の根幹にはこうした「文学」の楽しみを知ったうえで、ほかの小説、現代文などの理解につなげてほしいという意図があると思われる。

本稿では、筆者が大学で実際に行った講義をもとに、創作と鑑賞

を結びつけ二時限で構成した授業案を提案した。むろん、本稿で提示した句会実践の数を増やしたり、鑑賞の時間を深めることで、より多様な展開が見込まれる。特に、教科書掲載の俳句理解を深めることを目的にするならば、本稿ではあえて排除した文法的解説や、伝記の解説にも時間を割く必要がある。本稿もそうした作家論的理解を拒むものではない。しかし、俳句作品に関する知識、創作技法の向上だけを指すのではなく、ひろく詩歌、文芸一般へと関心をひろげる契機にしてほしい狙いがある。すなわち、俳句を「扉」とした文芸鑑賞の試みである。

また、創作講義の成果については一般的なコンクールに応募したり、句数がそろうようであれば簡易版で合同句集などの形にまとめられることも、学習者にとってモチベーションがあがる仕掛けとして積極的に取り入れたい。

注

- ① 文部科学省 学習指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm、二〇一七年九月一日閲覧
- ② 文部科学省 新学習指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm、二〇一七年九月一日閲覧
- ③ 俳人協会編『学校教育と俳句』(二〇〇一)には「小・中学校の国語教科書出版社に、教科書作成にあたって、俳句の有季定型の基本に則る

創作・鑑賞をふまえた俳句の授業

ことを引きつづき継続してほしい旨の要請状が發送された」とあり、教育現場に対して「有季定型」を強く求める声があったとわかる。

- ④ 一九五二、「狩」所属、鷹羽狩行に師事する。句集『水精』(本阿弥書店、一九八九)、『天弓』(角川書店、一九九五)ほか。当該の文章は「俳句の読み方、味わい方」『新しい国語3』(東京書籍)
- ⑤ 一九三五、「草苑」を経て「草樹」代表。桂信子に師事。現代俳句協会会長を経て、特別顧問。二〇一六年、日本芸術院賞受賞。句集に『りらの木』(草苑発行所、一九八〇)、『象』(角川書店、二〇〇〇)ほか。当該の文章は「俳句の可能性」『国語3』(光村図書)
- ⑥ 「ユネスコ文化遺産登録」目指す推進協設立」『毎日新聞』二〇一七年四月二四日
- ⑦ 「ユネスコ登録に向けての現状と今後」『俳句界』二〇一七年一〇月号
- ⑧ 「特集 俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進をめぐる」『鬘』二〇一七年八月号
- ⑨ 現代俳句協会青年部編『In situ』二(二〇一三)は「学校教育と俳句」を特集するが、そこで座談会「俳句と教科書」(高野ムツオ、藺草慶子、外山一機、司会・神野紗希)のなかで俳人協会が要請した教育現場における「有季定型厳守」について、無季俳句、自由律俳句などの多様な可能性を排除するのではないかと問題提起されている。
- ⑩ 俳句甲子園実行委員会監修『二冊まるごと俳句甲子園』俳句生活永久保存版』(角川学芸出版、二〇一〇)
- ⑪ 『金沢大学教育学部附属高等学校 高校教育研究』五四(二〇〇二年一月)
- ⑫ 『国語教育研究』五四(二〇一三年三月)、第回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議 協議課題「新しい学習指導要領と国語科授業・習得・活用・探究をどう扱うか」所収。

- ⑬ 『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』一〇(二〇一二年三月)
- ⑭ 『同志社国文学』六〇(二〇〇四年三月)
- ⑮ 『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』<http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/hdocs/>で公開されている。二〇〇四年、東京学芸大学附属国際中等教育学校での授業実践例。管理番号A0202。二〇一四年九月二日作成(二〇一七年九月一〇日閲覧)
- ⑯ 『子ども教育研究』八(二〇一六年三月)
- ⑰ 『人文科学教育研究』二三(一九九六年八月)
- ⑱ 担当した期間は次のとおり。
京都造形芸術大学「ことばと表現」(二〇一一年九月～二〇一七年三月)
- 園田学園女子大学「日本語表現」(二〇一一年九月～二〇一二年三月)
- 同志社女子大学「創作A、創作B」(二〇一五年四月～現在)
- 大阪大谷大学「創作Ⅱ」(二〇一五年四月～現在)
- ⑲ 歳時記が手元にならない場合、インターネット上で現代俳句協会の提供する「現代俳句データベース」(<http://www.haikudata.jp/>)で検索することも可能である。
- ⑳ 三浦、夏井前掲書では、感情語を使ったワークシートを紹介している(四四頁)。そこでは、「うれしいな」「かなしいな」を使った五七五の言葉を作ったうえで、感情語の部分を「春うらら」「梅雨曇り」などの季語に置き換える、という手法を提案している。また五味太郎『俳句はいかが』(岩崎書店、一九九四)では「チューリップ並んで咲いて楽しそう」を「チューリップ喜びだけを持っている 細見綾子」のように表すのが俳句、と解説する。
- ㉑ 作句の技術的な用語で「季語が動く」という表現がある。選択された季語が、内容にそぐわないという指摘であり、同じ季節の季語でも他の選択肢がないか、場合によっては季節そのものを変えても成り立つのではないか、といった検討が行われる。作者の実体験とは別に、作品としてどういう効果を生んでいるかという検討が行われるのであり、表現力を考えるうえでよい指標になるだろう。
- ㉒ 三浦、夏井前掲書ではこの「季語以外」を「俳句の種」と命名する。
- ㉓ 坪内前掲書では、「窓の露」(秋)の季語で作句をうながしたあと、「窓の露」と同じ情景を詠んだ句を除外して選句させる、という指導も行っている(二二頁)。
- 窓の露先生しわがふえてるね
窓の露目覚まし時計の音がする
窓の露朝日が映り露光る
窓の露さらりと光る露の玉
- これらの句のうち、後半2句を除外し前半2句は残されている。こうした操作は、最終的には現場の教員が判断することになるが、除外された生徒への対応も大切であり、俳句に対する知識がない場合は特に操作を行う必要はないだろう。
- ㉔ 坪内前掲書は、作者を伏せたまま合評を行うことで「作者の思ってもみなかったことに話が及ぶ」、自分自身が思っていない「自分を発見」することが、句会の魅力と述べる。
- ㉕ 先述したとおり、俳句を一部の基準、価値観だけで選ぶことは難しい。できるかぎり学生にも親しみやすい、現代の作家を多く取り入れたい。参考として、現代の作家を対象とした以下のようなアンソロジーがある。
宇多喜代子著『戦後生まれの俳人たち』(毎日新聞社、二〇一二年)
『関西俳句なま』(本阿弥書店、二〇一五年)
佐藤文香、黒瀬珂瀾、なかはられいこ編『大人になるまでに読みたい

短歌・俳句・川柳』一〇三（ゆまに書房、二〇一六）

河原地英武『平成秀句』（邑書林、二〇一六）

②6 作品は京都造形芸術大学「ことばと表現」公式ブログ（<http://koto-hyosho.jp/>）に公開されている。ブログでは執筆者の氏名も公開されているが、ここでは名前を伏せて転載する。

②7 前掲、注①風間氏論考

②8 山本純子「あれっ」ではじまる詩の創作…句会の授業の形式をベールにした詩の授業』『国語科教育』七〇（二〇一一）

表1 中学校・高等学校掲載俳句

出版社	書名	俳句	作者	備考
東京書籍	新しい国語3	たんぼぼや日はいつまでも大空に 囀をこぼさじと抱く大樹かな	中村汀女	片山由美子の文中
		をりとりてはらりとおもきすすきかな	星野立子	片山由美子の文中
		春風や鬨志いだきて丘に立つ	高浜虚子	片山由美子の文中
		万緑の中や吾子の菌生え初むる	中村草田男	
		赤とんぼ筑波に雲もなかりけり	正岡子規	
		冬菊のまとふはおのがひかりのみ	水原秋桜子	
		分け入つても分け入つても青い山	種田山頭火	
		どの子にも涼しく風の吹く日かな	飯田龍太	宇多喜代子の文中
光村図書	中学 国語3	いくたびも雪の深さを尋ねけり	正岡子規	宇多喜代子の文中
		跳び箱の突き手一瞬冬が来る	友岡子郷	宇多喜代子の文中
		たんぼぼのぼぼと絮毛のたちにつけり	加藤楸邨	
		分け入つても分け入つても青い山	種田山頭火	
		赤い椿白い椿と落ちにけり	河東碧梧桐	
		パスを待ち大路の春をうたがはず	石田波郷	
		万緑の中や吾子の菌生え初むる	中村草田男	
		飛び込みのもう真つ白な泡の中	神野紗希	
		桐一葉日当りながら落ちにけり	高浜虚子	
		金剛の露ひとつぶや石の上	川端茅舎	
		冬菊のまとふはおのがひかりのみ	水原秋桜子	
		日と月のごとく二輪の寒牡丹	鷹羽狩行	

					三省堂													学校図書				
																			中学			
																			国語3			
草の花がしあはせさうに黄色して	バスを待ち大路の春をうたがはず	一軒家も過ぎ落葉する風のままに行く	菫ほどな小さな人に生れたし	まさなる空よりしだれざくらかな	桐一葉日当りながら落ちにけり	戦没の友のみ若し霜柱	捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて	逢ひに行く開襟の背に風溜めて	きみ嫁けり遠き一つの計に似たり	子の髪の風に流るる五月来ぬ	万緑の中や吾子の菌生え初むる	水の揺れが魚に移れり半夏生	冬蜂の死にどころなく歩きけり	鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる	この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉	芋の露連山影を正しうす	つきぬけて天上の紺曼珠沙華	分け入つても分け入つても青い山	滝落ちて群青世界とどろけり	春風や闘志いだきて丘に立つ	凍蝶のなほ大いなる凍降りぬ	咳をしても一人
細見綾子	石田波郷	河東碧梧桐	夏目漱石	富安風生	高浜虚子	三橋敏雄	鈴木ゆすら	草間時彦	高柳重信	大野林火	中村草田男	大木あまり	村上鬼城	加藤楸邨	三橋鷹女	飯田蛇笏	山口誓子	種田山頭火	水原秋桜子	高浜虚子	藤田湘子	尾崎放哉
	俳句十句				俳句の世界	命	命	愛	愛	愛	愛	生き物	生き物	生き物	花	花	花	風景	風景	風景		小林恭二の文中

筑摩書房																					教育出版	
高校																					中学	
精選国語総合																					伝え合う言葉 中学国語3	
バスを待ち大路の春をうたがはず	こんなよい月を一人で見て寝る	夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ	咳の子のなぞなぞあそびきりもなや	風雪にたわむアンテナの声を聴く	いくたびも雪の深さを尋ねけり	燕はやかへりて山河音もなし	をりとりてはらりとおもきすすきかな	啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	噴水のしぶけり四方に風の街	万緑の中や吾子の菌生え初むる	ひつばれる糸まつすぐや甲虫	ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな	赤い椿白い椿と落ちにけり	春風や鬨志いだきて丘に立つ	入れものがない両手で受ける	分け入つても分け入つても青い山	いくたびも雪の深さを尋ねけり	咳の子のなぞなぞあそびきりもなや	星空へ店より林檎あふれをり	芋の露連山影を正しうす	万緑の中や吾子の菌生え初むる	何もかも散らかして発つ夏の旅
石田波郷	尾崎放哉	種田山頭火	中村汀女	山口雪子	正岡子規	加藤楸邨	飯田蛇笏	水原秋桜子	石田波郷	中村草田男	高野素十	村上鬼城	河東碧梧桐	高浜虚子	尾崎放哉	種田山頭火	正岡子規	中村汀女	橋本多佳子	飯田蛇笏	中村草田男	大高翔
春			冬	冬	冬	秋	秋	秋	夏	夏	夏	春	春	春								

筑摩書房	高校	国語総合	炎天の速き帆やわがこころの帆	山口誓子	
			夏草に気缶車の車輪来て止る	山口誓子	
			白牡丹といふといへども紅ほのか	高浜虚子	
			春風や闘志いだきて丘に立つ	高浜虚子	
			いくたびも雪の深さを尋ねけり	正岡子規	
			柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺	正岡子規	
			みづうみのみなどのなつのみじかけれ	田中裕明	
			子燕のこぼれむばかりこぼれざる	小澤實	
			冬深し柱の中の濤の音	長谷川権	現代の句
			いつせいに柱の燃ゆる都かな	三橋敏雄	
			水枕ガバリと寒い海がある	西東三鬼	
			咳をしても一人	尾崎放哉	無季
			海に出て木枯帰るところなし	山口誓子	
			遠山に日の当りたる枯野かな	高浜虚子	
			いくたびも雪の深さを尋ねけり	正岡子規	冬
			この樹登らば鬼女となるべし冬紅葉	三橋鷹女	
			啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	水原秋桜子	
			芋の露連山影を正しうす	飯田蛇笏	秋
			子を殴ちしながき一瞬天の蟬	秋元不死男	
			餅して山ほととぎすほしいま、	杉田久女	
			万緑の中や吾子の菌生え初むる	中村草田男	夏
			春ひとり槍投げて槍に歩み寄る	能村登四郎	
			隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな	加藤楸邨	

				筑摩書房	高校	精選現代文B													
	しんしんと肺碧きまで海のたび	篠原鳳作																	
	炎帝につかへてメロン作りかな	篠原鳳作																	
	月光に深雪の創のかくれなし	川端茅舎																	
	金剛の露ひとつぶや石の上	川端茅舎																	
	した、かに水をうちたる夕ざくら	久保田万太郎																	
	竹馬やいろはにはへとちりどく	久保田万太郎																	
	うしろすがたのしくれてゆくか	種田山頭火																	
	分け入つても分け入つても青い山	種田山頭火																	
	冬蜂の死に所なく歩行きけり	村上鬼城																	
	瘦馬のあはれ機嫌や秋高し	村上鬼城																	
	雛飾る手の数珠しばしはつしおき	瀬戸内寂聴																	
	恋すれば言葉少しソーダ水	吉屋信子																	
	もろもろの浴衣に江戸を祭りけり	佐藤春夫																	
	あんずあまさうなひとはねむさうな	室生犀星																	
	青蛙おのれもペンキぬりたてか	芥川龍之介																	
	有る程の菊抛げ入れよ棺の中	夏目漱石																	
	筆とれば若葉の影す紙の上	森鴎外										俳句の窓							
	海とどまりわれら流れてゆきしかな	金子兜太										あんずあまさうな							
	湾曲し火傷し爆心地のマラソン	金子兜太																	
	雨ふるふるさとははだしであるく	種田山頭火																	
	うしろすがたのしくれてゆくか	種田山頭火																	
	鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる	加藤楸邨																	
	鯛雲人に告ぐべきことならず	加藤楸邨																	

三省堂	高校	現代文B	鞆鞆を漕ぐとき父も地を離る	鷹羽狩行	鞆鞆
			鞆鞆は漕ぐべし愛は奪うべし	三橋鷹女	
			日本海に稲妻の尾が入られる	夏石番矢	
			桜散るあなたも河馬になりなさい	坪内稔典	
			螢籠昏ければ揺り炎えたす	橋本多佳子	
			湾曲し火傷し爆心地のマラソン	金子兜太	
			滝落ちて群青世界とどろけり	水原秋桜子	
			夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	山口誓子	
			やがてランブに戦場のふかい闇がくるぞ	富沢赤黄男	
			しんしんと肺碧きまで海のため	篠原鳳作	
教育出版	高校	現代文B	どうしようもないわたしが歩いてある	種田山頭火	現代の俳句
			流れ行く大根の葉の早さかな	高浜虚子	
			神々のあくびが桜を枯らすのか	夏石番矢	
			千年の留守に瀑布を掛けておく	夏石番矢	
			樹々ら／いま／切株となる／笈かな	高柳重信	
			軍鼓鳴り／荒涼と／秋の／莖となる	高柳重信	
			雷落ちて火柱見せよ胸の上	石田波郷	
			雁や残るものみな美しき	石田波郷	
			兵隊がゆくまつ黒い汽車に乗り	西東三鬼	
			算術の少年しのび泣けり夏	西東三鬼	
			きしきしときしきしと秋の玻璃を拭く	三橋鷹女	
			鞆鞆は漕ぐべし愛は奪うべし	三橋鷹女	
			螢籠昏ければ揺り炎えたす	橋本多佳子	

													明治書院
													高校
													精選現代文B
朴散華即ちしれぬ行方かな	ぜんまいのの字ばかりの寂光土	金剛の露ひとつぶや石の上	常夏の碧き潮あびわがそだつ	鶴舞ふや日は金色の雲を得て	花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ	綱から投げ出された太刀魚が躍つて砂を噛んだ	思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇	赤い椿白い椿と落ちにけり	糸瓜咲て疲のつまりし仏かな	鶏頭の十四五本もありぬべし	夏嵐机上の白紙飛び尽くす	火の筆勢そのままに雪大文字	
川端茅舎	川端茅舎	川端茅舎	杉田久女	杉田久女	杉田久女	河東碧梧桐	河東碧梧桐	河東碧梧桐	正岡子規	正岡子規	正岡子規	鷹羽狩行	